



関西学院同窓会 大阪支部

INTERVIEW

<http://www.kwangaku-osaka.org>

2016.05

探訪記

FILE

No.12

ユアサM&B株式会社 代表取締役社長 松田 憲二氏

昭和39（一九六四年）関西学院大学 文学部英文学科 卒業

社長になっても、変わらぬ行動力で、
いつも新しいことに挑戦し続ける。

——まず、関西学院大学に進学されたきっかけを聞かせていただけますか？

子供の頃から、ゲリー・クーパーやジョン・ウエインが出てくるような西部劇映画が大好きで、小学生の頃から、意味も分からずに、映画音楽を英語で口ずさんでいました。英語の歌をいっぱい覚えて、単語や綴りもわかるようになって、中学や高校では英語が得意科目になりました。周囲からも褒められ

るし、そうなるも自分でも楽しい。大学でも好きな英語を勉強したいと思い、関学の英文科に進学しました。

——どのような学生生活を送られたのでしょうか？

2つのクラブに入る学生は少なかったと思いますが、軽音楽部とE.S.S.を掛け持ちしました。他にも友人とバンドを組んでカントリーウエスタン演奏したりと楽しく充実した学生生活でした。また、女子学生が少ない当時でも、英文科は男女半々ぐらいの割合で、非常に華やかでした。そういう意味でも、楽しい学生生活でしたよ。

——卒業後の進路は、どのように考えられていましたか？

父が戦死し、教師の母に育てられたので、漠然と教師になろうと思っ、高等学校と中学校の教員免許をとりました。ところが、母からは「教師は、安定しているけれど、定年の時の給与までわかってしまうような世界。面白いと思うか？男ならば、もっと自由なことをしなさい。社長をめざしなさい。」と言われました。英語もできるの、いくつかの企業から声をかけてもらいましたが、東京勤務や海外勤務になると母をひとり大阪に残すことになってしまいます。そんな折、父の知人がYSBユアサ電池販売の社長を

していました。当時は、大卒の社員が少ない会社で、ここならいろんな勉強ができるだろうと入社を決めました。

——どのような社員だったのでしょうか？

研修後はずっと営業部に配属になりました。法人向けの自動車バッテリーや産業用バッテリーを担当して、思う存分やりました。その傍ら、ゴルフや囲碁にも熱中し、随分と上達しました。実は、営業成績は常にトップでしたが、社員表彰を受けたことがないのです。どうも、品行面では評価されていなかったようです。

営業利益でもかなりの貢献をし、周囲より速昇格もしました。38歳の時、当時の社長に「給料を100万円にあげてほしい」と言いました。また、部長代理くらいで、給料は35万円ぐらいだったと思います。もちろんそれは無理難題と分かっていて、「会社はNOと言っただろうから、退職して起業しよう」と心の中では思っていました。ところが、意外にも、取締役昇格させるということになりました。私だけが30代で、他の役員の方々は50代や60代。きっと面白くない人も多かったと思います。

——なぜ、そのような成果を収めることができたのですか？

もちろん、関学人脈に恵まれたこともあります。加えて、自分の得意分野のゴルフ、英語が役に立ったと思います。ゴルフはシングルですので、いろんな企業の方から声をかけてもらいました。また、海外に行った際には、通訳もしました。他の企業の先輩方からかわいがってもらったことで、随分と得をしたと思います。

でも、自分から「ゴルフができる」とか「英語ができる」とかを言ったことはありません。相手からアドバイスを求められたら答える、困っていたら助けるという姿勢を貫いています。先日、ある結婚披露パーティでピアノの弾き語りをしたら、「松田さん、ピアノも弾けるの？」と驚かれました。自分から得意だと言うより、そのサプライズの方が結果的に得をします。

——現在の会社、ユアサM&Bを創業されたこと



ユアサM&B株式会社 代表取締役社長
松田 憲二（まつだ・けんじ）氏

きの思いや苦労を教えてください。

以前の会社では、専務までさせてもらいましたが、ずっと社長になりたいと思っていたので、自ら出資し、銀行からの借り入れも、21年前に現在の会社を設立しました。その際、銀行から、「生命保険に入ってくれ」と言われ「ああ、これは命をかけてやるということなんだ」と改めて思いました。そんな簡単に売上が上がるわけでもなく、競合他社に負けることもあり、眠れない夜もありました。当時は、家族にも話すことができませんでした。

—— 創業当時から、太陽光発電や電気自動車などに取り組まれましたか？

その頃の大阪は空気が汚れていました。「大阪の子供たちに、きれいな星空をみせてやりたい」と思い、太陽光発電や電気自動車など、環境にやさしい事業に取り組みたいと思いました。今から20年以上前のことですから、周囲からは「えっ、電気自動車？」、「えっ、太陽光発電？」と驚かれました。これは、今では当社の主力事業になっていますが、当時はそんなことで予想していませんでした。ただ、「大阪の子供たちのために空気をきれいにしたい」という思いだけです。

環境 (Environment)、エネルギー (Energy)、高齢化社会 (Elder) という3つのEは、創業当時から変わらない当社のテーマです。

—— 実際には、社長になられていかがでしたか？

「給料を100万円ほしい」と言った30代の頃は、「社長になったら、大きな家に住んで、いい車に乗



って、女性にもって、いい生活ができる」と思っていた気がします。でも、実際に創業してみると、そういう私利私欲はきれいさっぱりなくなりました。そんなことをしていたら、社員はついてこないでしょう。家もポロポロでいいし、外車やスポーツカーに乗りたいたとも思いません。

会社は、何のために存在するのか？1番目は社会のためです。2番目が社員で、3番目が株主として、最後が経営者です。

社長を怒ってくれる人はいません。でも、会社の数字は私のノルマだと思わなければならない。この4年間、増収増益を続けていますが、次も絶対に達成しようと思っています。社員に頑張ってもらおうと思ったり、社長はそれ以上に頑張らないとダメです。社長が椅子に座って、口であれこれ言うような会社ではダメだと思っています。この規模であれば、社長自らがやらなければならないと思っています。

また、同じことをやりつづけていてはいけません。新しいことに挑戦しないと結果は下がっていきます。私は、いつも、7つぐらい新しいことをしようと言っています。

—— 経営者として大切にされていることを教えてください。

社員は家族だと思っています。時には、服装や髪の色のことまで注意することもあります。でも、それは、父親が子供に注意するのと同じことです。社員もそう理解してくれているので、セクハラやパワハラと言われることはありません。

社員は社会の次に大切と言っているので、利益を

あげたらきちんと昇給・賞与で還元しています。男女差別もありません。おかげで、ここ7〜8年、退職した女子社員はいません。社長や役員はそうでもありませんが、社員の処遇は他社には負けていないと思っています。当社では、目標達成の報奨金は、社長も新入社員もアルバイトもみんな同じ金額です。当社は、反対方向を向いて船を漕いでいる社員は一人もいない。これは自信を持って言えます。

—— 大阪・関西に期待することはありますか？

大阪を絶対「元気にせなあかん」と思っています。東京からみると大阪は一つの地方都市になってしまっています。ぜひ、大阪を第2首都として盛り返したい。関西には、京都の寺社仏閣、奈良には法隆寺、西には姫路城と、電車で4〜50分の中に、たくさん素晴らしい世界遺産があります。これは東京にはない魅力ですから、観光局などは大阪に持つてきてほしいと思っています。第2首都にするためにも、私自身が、そして、当社が頑張らなければと思っています。

—— 関西学院大学の学生や若い卒業生たちにメッセージをお願いします。

関学生であることに誇りをもつてほしいと思います。私の年代では関学出身の経営者がたくさんいますが、若い世代はどうなるだろうかと不安に思っています。もちろん、卒業生自身も頑張してほしいですが、関学の社会的評価があがるように、大学も頑張してほしいと思います。

私は、関学が大好きで寄付を続けていますが、それ以外にも、卒業会への寄付、東北や熊本への支援

も続けています。私が、このように、社会貢献に取り組んでいるのは、学生時代に教えてもらった「Mastery for Service」という言葉があるからです。この20年ぐらいい、この言葉が、身に染みてわかるようになりました。そんな素晴らしい学校であることに誇りを持ってほしいと思います。

—— ありがとうございます。

2016年10月

場所：ユアサ電機株式会社内にて

取材：伊藤理／松野雄／岡田詠／関幸部

松田 憲二(まつだ・けんじ)氏

ユアサM&B株式会社 代表取締役社長

1964年 関西学院大学金融部卒業

同年 YSBユアサ電池販売株式会社入社

1981年 取締役

1992年 専務取締役

1995年10月より 代表取締役社長

1996年10月より マイト素代表取締役社長 社長

同年4月より 大阪府都市生活情報センター(旧)大阪幹書長

1999年4月より ユアサ商事株式会社 特別顧問

2002年 経済同友会カンパニー研究会 座長

2005年 経済同友会都市経済政策委員会 副委員長

2009年 関西環境整備大使

2009年 大阪府担出資法人に関する専門家会議委員

編集後記

社長になっても、変わらぬ行動力を発揮し続ける松田先生。『社員に頑張ってもらおうと思ったら、社長はそれ以上に頑張らないとダメ』『同じことをやりつづけてはいけません。新しいことに挑戦しないと結果は下がっていきます。』というお話が印象的でした。私も新しいことを初めてみなければ、と強く思いました。

編集室長 小島幸保(1995年法学部政治学科卒)